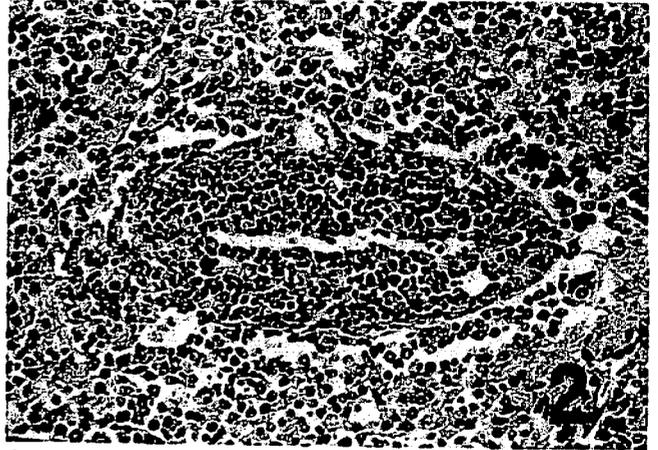
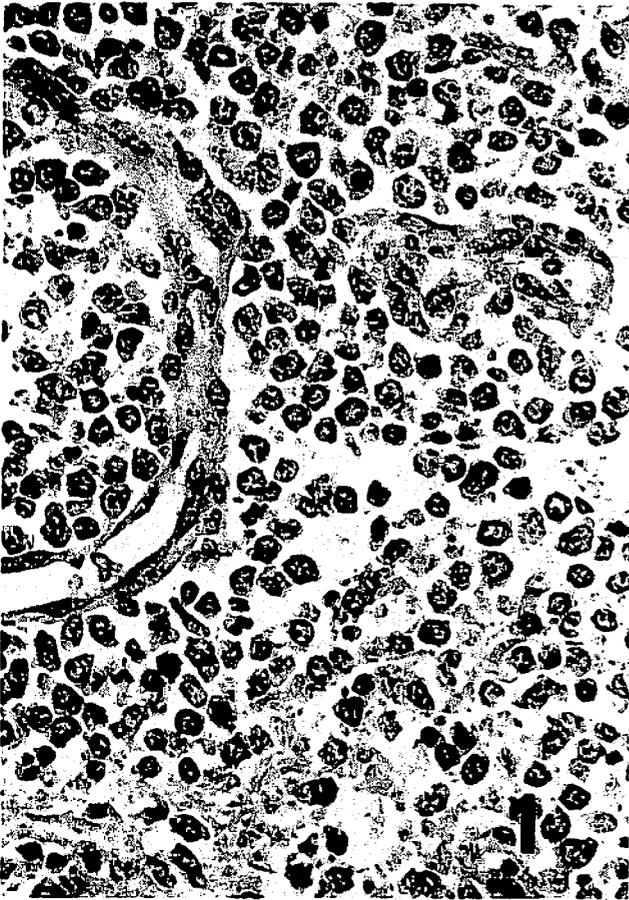


イヌの小脳

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第25回獣医病理学研修会標本No.442



動物：雑種，雌，7歳。

臨床：1981年6月29日，1週間程前から食思廃絶，嘔吐，右側斜頸との稟告で本学家畜病院に来診。初診時，起立可能なるも歩行不能。右側へ全身傾斜。全身皮膚知覚著しく鈍麻。前頭部および顔面にチック。両側眼球振盪。瞳孔反射常。ジステンパーワクチンの接種歴なし。翌日横臥のまま起立せず，午後2時頃死亡。

剖検所見：1) 犬糸状虫症；I，右心・肺動脈に犬糸状虫数隻寄生。II，軽度うっ血性肝硬変。III，肺のう，血水腫並びに寄生虫性栓子多発。2) 脾の中等度腫大。3) 透明希薄脳脊髄液軽度増量。脳，髄膜に著変なし。4) 小腸に瓜実条虫数隻寄生。

組織所見：提出標本に見られる病変は右小脳半球髄質から右小脳脚，前庭脊髄路および前庭神経核を中心とする延髄右肩の部分に限局していた。病巣は肉眼的に境界不明瞭で，僅かに腫脹していた。主要組織病変は血管周囲に主座する腫瘍細胞増殖で，周囲神経組織への浸潤性増殖も活発であった。腫瘍細胞核は比較的明瞭で，明瞭な核小体を1ないし数個有し，細胞質はやや乏しく，類円

形，両染色ないし弱好塩基性，微細顆粒状で，有糸分裂像が屢々見られた(写真1，HE)。この腫瘍細胞は中型ないし大型リンパ球と思われ，酵素抗体間接法ではIgGを富有していた。細小動・静脈，特に細静脈周囲では小リンパ球を主体とする囲管性細胞集簇が認められ，腫瘍細胞増殖域はその外側に位置していた(写真2，HE)。鍍銀染色切片では(写真3，N・F-渡辺変法)，小リンパ球を主体とする囲管性集簇は細網線維の網眼，すなわちVirchow-Robin腔に位置しており，腫瘍細胞自身が細網線維を形成する傾向はなかった。腫瘍細胞増殖が重度な髄質では，髄鞘脱落に加え，少数の肥胖膠細胞が出現していた。

組織診断名：未分化リンパ肉腫。本例では脳以外に腫瘍性病変は見当らなかつたので，脳原発リンパ肉腫と思われる。類似あるいは同一の脳原発腫瘍として，小膠細胞腫症，細網症(標本No.212&252：東京農工大学出題)，および細網肉腫などがある。